

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 三田校地拂下げの期日について  |
| Sub Title        |   |
| Author           | 會田, 倉吉 (Aida, Kurakichi)  |
| Publisher        | 三田史学会   |
| Publication year | 1954  |
| Jtitle           | 史学 Vol.27, No.2/3 (1954. 5) ,p.390(488)- 393(491)   |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 雑報<br>慶應義塾史研究特輯   |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19540500-0390">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19540500-0390</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

それ以前であらうことも察せられよう。そこで、さらに圖中の記載を検討してみると、前圖に載つてゐる學校として、二大區九小區の「慶應義塾」は別として、二大區一小區に「工學寮」、四大區一小區に「開成學校」、同二小區に「外國語學校」、「女學校」、同五小區に「史ハシ學校」、「女師ハシ學校」その他があり、これらのなかで最も新しいのが女子師範學校で明治七年三月の創立、翌八年十一月二十九日に開校してゐる。したがつて、この記載があるからには當然それ以後のものでなければならぬまいけれど、ただ、そこに創立と開校との間に少しくはばがあり、その間明治七年十二月二十七日外國語學校から分離して出來た東京英語學校（舊一高の前身）が記されていないのは、大體本圖がこの前後になるものといえなからうか。そして、後圖の場合もやはり女子師範の記載があつて、それ以後の刊行とは知れるが、これでは前圖の二大區八小區に「救育所」とあるものがその邊一帯廣く「勸業寮御用地」とあつて、その點明治九年の圖と同じになつてゐる。

なお、後圖には二大區九小區に「慶應義塾」と正しく出ていて、その地内に「奥平」と、義塾創立者福澤諭吉の舊藩主の名もみえてゐる。奥平は當主昌邁、明治十四、五年ごろ三代目芝區長などつとめて、明治十七年十一月二十六日三十才の若さでこの地に卒したのである。（二八、一一、一九）（會田倉吉）

### 三田校地拂下げの期日について

慶應義塾が芝新錢座から現在地の三田に居を移したのは明治四年三月のことであつた。この移轉の理由、経緯等の事情については「福翁自傳」がそれを詳らかに語つてゐるので省略しようが、はじめは土地は一萬千八百五十六坪を東京府から貸下げ、同所にある建物の方は七百六十九兩二分一朱で一切が拂下げられたといわれ、「慶應義塾五十年史」（八五頁）、「慶應義塾七十五年史」（四九頁）、「福澤諭吉傳」第一卷（七四五頁）等にその明治三年十一月附指令書が載つてゐる。

しかし、ここは元來島原藩の中屋敷であつたところで、福澤がそれを各方面に奔走し、一旦政府から島原藩に上地を命じて東京府のものとなさせ、あとで府から義塾の名儀人である福澤諭吉に貸下げることにして貰つたのであつた。したがつて、福澤にしてみれば、借地の間はいつ立退を命ぜられるかも知れない。なんとか速かにこれを買受けることにしたいと考えたのも當然であらう。それについて、「福翁自傳」はまた語つて曰く、

三田の屋敷は福澤諭吉の拜借地になつて、地租もなければ借地料もなし恰も私有地のやうではあるが、何分にも拜借と云へば何時立退を命ぜられるかも知れず、東京市中を見れば私同様官地を拜借して居る者は甚だ多い、孰れも不安心に違ひないと推

察が出来る。如何<sup>どう</sup>かして之を御拂下にして貰ひたいと様々思案の折柄、當時政府に左院と稱して議政局のやうなものが立て居て、其左院の議員中に懇意の人があるから其人に面會、何か話の序には拜借地の有名無實なるを説き、等しく官地を使用せしむるならば之を私有地にして銘々に地所保存の謀<sup>はかりごと</sup>を爲さしむるに若かずと、頻りに利害を論じて其人の建言を促したるは毎度の事で、其他政府の筋の人にさへ逢へば同様の事を語るの常なりしが、明治四年の頃、それかあらぬか、政府は市中の拜借地を其借地人又は縁故ある者に拂下げるとの風聞が聞える。是れは妙なりと大に喜び、其時東京府の課長に福田と云ふ人が専ら地所の事を取扱ふと云ふ事を聞傳へ、早速福田の私宅を尋ねて委細の事實を確かめ、いよく發令の時には知らして呉れることに約束して、歸宅して日々便りを待て居ると、數日の後に至り、今日發令したと報知が來たから、暫時も猶豫は出來ず、翌朝東京府に代理の者を差出し御拂下を願ふて、代金を上納せんと金を出した處が、府廳にも昨日發令した許りで出願者は一人もなし、マダ帳簿も出來ず、上納金請取の書式も出來ずと云ふから、其正式の請取は後日の事として今日は唯金子丈<sup>だけ</sup>の御收納を願ふと云て、強ひて金を渡して假り御拂下の姿を成し、其後地所代價收領の本證書も下りて、いよく私の私有地と爲り、地券面本邸の外に附屬の町地面を合して一萬三千何百坪、

本邸の方は千坪に付價十五圓、町地の方は割合に高く、兩様共算して五百何十圓とは、殆んど無代價と申して宜しい。(「福澤選集」第六卷、二二二—二三頁)

と。いかにも福澤一流の手際のよさで、ついに同地の拂下げに成功したわけである。この福澤の機敏さのかげには、もちろん、まごまごしている、舊島原藩から取返えされないと限らぬといった不安があつたことであらう。事實、あとになつて、もとの所有者たる舊藩主松平家からこれをさらに譲受けたという交渉があり、それに對するいわば斷りが「續福澤全集」第六卷(五二八—五三〇頁)所收の書翰六四九、六五〇にうかがえる。宛名は舊島原藩主松平忠和の家職山本拙太郎で福澤諭吉・莊田平五郎連名のもの、日附は前者が八月六日、後者が八月十一日で、原文には年の記載がないけれども、一應明治五年ということになつてゐる。

ところで、この拂下げの期日の問題についてだが、さきに引用の「福翁自傳」では「明治四年の頃」のこととしており、右書翰では明治五年になつてそれに關する悶着が起つてゐるようになり、しかも「福澤諭吉傳」第一卷(七四七頁及び七四九頁)にはこれを明治五年五月と記している。しかるに、同年五月から七月までは恰度福澤が關西に旅行中で、どうも福澤がこうして不在の間に前記のような手早い處置を講じて拂下げを受けたというの

は解し難い、つまり「明治五年五月」という點にいささか疑義があるのではあるまいか、と、これは富田正文氏のおこされた疑問であつた。そこで少しく調査の結果、「法令全書」から左の如き資料を得た。

まず、明治五年正月（大藏省、無號）の「東京府下地券發行地租收納規則」（「法令全書」明治五年、七一四―七二〇頁）に、

第五 從來貸附地ノ分ハ其坪數ヲ點檢シ是迄ノ拜借人ヘ低價ヲ以テ可拂下等ニ付地位ヲ上中下ノ三等ニ分チ左ノ低價標準ヲ以テ拂下代金高取極メ上納可爲致事

低價標準

一上等 千坪ニ付金廿五圓

一中等 同斷ニ付金廿圓

一下等 同斷ニ付金拾五圓

一拜借地ハ低價ヲ以テ拂下ケ遺スト雖モ比隣ノ地券金高ト格別相違アル時ハ以後税金等ノ割合ニ不公平ヲ相生シ可申候間實地拂直段ニ拘ハラス比隣ニ的當ノ地券金高相定メ下ケ渡ス

ヘキ事

とあり、これがどうやら拜借地拂下げ云々のものになる規則かと思われる。そして、東京府ではこれに基づき、さらに二月十日附達をその六大區正副戸長に宛てて發し、そのうちに、

一華土族卒其外拜借地ノ分ハ別紙規則之通更ニ拂下ケ相成候條

前同斷繪圖面相添地券掛ヘ可願出候事  
と規定している。また、この別紙「地券申請地租納方規則」の第三には、

一從來武家地拜借地之分當府貫屬ハ勿論諸官員並普通ノ寄留人ト雖モ當府ヘ寄留屈濟地所拜借罷在候者ハ其坪數ヲ點檢シ是迄ノ拜借人ヘ低價ヲ以拂下ケ地位ハ右拂下ケ直段ニ不拘比隣ノ地券金高ニ見合券狀相定メ下ケ渡可申事

但寄留ノ向ハ故アツテ致歸縣候トモ地所ハ所持候テ不苦候條右歸縣中引請人相立置地所ニ付候諸務ヲ掌ラシムヘシ尤其段ハ前以可届出事

とみえる。なお、この末尾別紙に出ている「地券願日割」というものによると、塾の所在する第二大區九小區の願日割は左の通りになつてゐる。

二月廿八日ヨリ 第二大區  
三月十日マデ

ここに、以上をもつて察すれば、拂下げ云々のことは明治五年正月或はその前年末頃から既にわかつていたことで、二月十日これが東京府から正式に公布されるや、福澤は早速書類を提出して手続きをすませたもので、「福澤諭吉傳」にある五月云々というのは、もしそれにこだわるなら、右の書類に對する認可というか、許可というか、とにかく本件の本ぎまりになつたときなのではなかつたらうか。そうすれば、福澤が手早くこの手続きをすま

せて、一應その見通しのついたところで關西旅行に出かけて行つたものといった解釋が成立つかと思う。

最後に、前述の「福翁自傳」にみる約一萬三千坪を五百何十圓かで拂下げたというのは、上等千坪に付金廿五圓の基準から計算すれば大分いい價のようである。(二九、三一、〇)(會田倉吉)

### 「法律學校入社帳」について

慶應義塾に保存されている古記録中の一冊に「法律學校入社帳」というのがある。

義塾の入門帳には、もともと、文久三年春にはじまる「姓名録一」以下數十冊に及ぶ大部なものが傳わつていて、右の入社帳ももちろんその一部とみなされる。ただ、大きさは一般のものが多く美濃判か美濃大判なのに對し半紙判でやや小型。裝釘は背革の洋綴。見返えしに「法律學校入社帳」と墨書してあつて、なかは和紙フクロ綴一四八葉からなり、用紙は他の入門帳にもみられるように、その各面が本人姓名、府縣、身分、宿所、父或ハ兄弟ノ姓名、年齢、社中ニ入タル月日、入社證人ノ姓名等の各項に分たれた欄を設け、柱に「姓名録」及び「慶應義塾」と入つてゐる。

ところで、この入社帳につきいささか問題がある、というのは、右入社帳の記述の前半の部分に關する疑義である。まず、この入社帳の記載は用紙一四八葉のうち一から二八葉目までの表裏

各面に一名づつ計五六名があるのみで、あとの一二〇葉は全く空白のまま残され、その記載二八葉のうち、一から一二葉目表までは小泉信吉(明治七年六月二七日入社)以下谷田鼎(明治八年一月二三日入社)に至る福澤諭吉を含む二三名が記され、次いで一二葉目裏の欄外には「此所ヨリ以下法學生徒性(姓)名也」とあり、そこから小倉龍一郎(明治一二年二月入社)以下森岡守衛(明治一三年六月一三日入社)までが三三名――。しかも、この後半の概ねは本塾生に占められて二四名、それから法律専門通學生が六名、身分の記載なきもの二名、本塾教員一名で、本塾生中には鷗外の作品で有名な澁江抽齋の子澁江保の名などをみることが出来る。

それでは、前半一から一二葉目表にわたる二三名の記載は果してなにを意味するか、これをしも法律學校關係の記述とするには少しく不審を免れぬような氣がするのである。第一は入社年代がおかしいこと、次に記載氏名がいずれも身分は書いてないけれどもいわば當時既にみな教師級の人々で、いまさら入社というのも解せない。慶應義塾内に設けられた法律學校のことについては、別に手塚豊教授が詳細を發表されると思うが、同校はそもそも明治十二年十月以後に置かれたもので、ここにはや明らかなる年代的ズレがあり、かりに、それ以前にさかのぼつては、明治六、七年頃新歸朝の兒玉淳一郎をして塾生に對し法律の講義をさせたこと